

「最も大切な戒め」マルコ12章28-34節

今朝は、私どもの教会の創立39周年の記念礼拝でございます。恐らく、私がこの教会の牧会者として創立記念礼拝において説教の奉仕をするのは今回が最後になるのではないかと思います。そこで今日は私が今まで教会の牧会方針として毎年掲げさせて頂きましたマルコの福音書12章28-34節の御言葉から「最も大切な戒め」と題して、イエスの教えから私たちの信仰において最も大切なことは何かということをお学んでみたいと思います。

今日の箇所では、あるユダヤ教の律法学者がイエスのもとにやってきて一つの質問をいたしました。それは「すべての中で、どれが第一の戒めですか。」という質問でした。

この律法学者の質問に対してイエスは次のように答えたのでした。「29-31節」実はここで、イエスが第一の戒めとして引用されたのは、旧約聖書の申命記6章4節の御言葉でした。次の第二の戒めの「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」という御言葉もイエス独自の教えであるかのように思われるかもしれませんが決してそうではありません。実はこの第二の隣人愛の戒めも旧約聖書のレビ記19章18節からの引用なのであります。

しかもイエスはここで、この二つの戒めを旧約時代のイスラエルの民だけでなく、キリスト者も含むすべての信仰者が守るべき最も大切な戒めとして取り上げているのであります。

それでは、何故イエスは「すべての中で最も大切な戒め」としてこの二つの旧約聖書の御言葉を示されたのでしょうか？

私は、それはこの御言葉にこそ、神が人間を創造された本来の目的が示されているからではないかと思うのです。創世記の1章26節を見ますと、私たち人間は特別に「神のかたちの似姿に造られた。」ことが記されています。そして、そのように人間が神のかたちに似せて造られたのは、人間が神と交わる特別な存在として造られたのだと言われます。つまり、そもそも人間は神と交わり、神から愛され、神を愛する、神さまと関わる存在として造られたというのであります。そして、私たち人間はこの「神を愛する」最も具体的な表現として、「神を礼拝する」のであります。それは私たち人間がこの「神を礼拝する」ことを通して、神が人間の創造主であること、そして私たち人間が神によって造られた被造物であり、神によって生かされている存在であることを常にわきまえ知り、心から神を喜び、崇めるためです。それと共に神のかたちに似せて人間を造られたのは人間が神に代わってこの被造世界を支配するためでした。そして神さまがこの尊い使命を達成するにあたり、人間に命じられたことは「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」という家庭の建設であり、社会の建設でありました。それはこの神の遠大な使命、文化命令はアダムとエバの二人だけでは到底実行することなどできないからです。それでは、私たち人間がこの世界で子ども産み、家庭を建設し、社会を建設していく上で最も大切なことは何でしょうか。それは私たちが神を愛することだけでなく「あなたの隣人を自分自身のように愛する。」ということなのであります。何故なら、人間はただ神と関わる存在として造られているだけでなく、人と関わる存在としても造られているからです。ですから、この「神を愛し、私たちの隣人を自分自身のように愛する」ということは、人間が神のかたちに似せて造られた創造の目的であると共に、この被造世界を治めるという神の遠大な使命を達成していく上で最も大切な戒めなのであります。

ところが、最初の人類であるアダムとエバは神さまの言葉ではなく悪魔の言葉を信じて罪を犯してしまいました。その結果、人間の神の御顔を避ける生活が始まったのです。こうして、罪を犯した結果、神との交わり、神との愛の関係が壊れて行ったのです。しかし、壊れたのは神さまとの関係だけではありませんでした。その結果、私たちの最も身近な隣人であ

る夫婦関係にも愛の亀裂が生じてしまったのです。ここに神への愛、隣人^{となりびと}への愛を失った人間の姿があります。そのため神はこの失われた愛をもう一度回復するために、イエス・キリストを遣わし、救いの計画をお立て下さったのです。

それでは、イエスはこの時、律法学者の問いに対して、何故第 1 の戒めは「神を礼拝することである」と言わずに「神を愛することだ」と言われたのでしょうか。それは神を礼拝することは神を愛することの結果であり、神を愛することは神を礼拝する根本的な動機であるからです。もしもこの神への愛がなければそのような礼拝は形ばかりの実体のないものとなり、空しいものとなるからであります。またある牧師は、この愛こそが「神のかたち」そのものであり、本質だからであると語ります。そもそも私たち人間を造られた神が愛の神だからです。その本質が愛である神がその「神の愛のかたちに似せて」私たち人間を互いに愛し合う存在として造られたのです。ですから、私たちが神を礼拝する時に、この神を愛しているか、神を愛する愛があるかどうか最も大切なことなのです。しかし今日の私たちクリスチャンであっても、ややもすると神への愛を失い、信仰が形式的になる、偽善的になるということがあるのではないのでしょうか。そしてこの神への愛を失いますと、隣人^{となりびと}への愛まで人から賞賛を受けるための偽善的なものに変容していくのです。

そういう意味では、私たちも神を愛するだけでなく、私たちの隣人^{となりびと}を心から愛する者になりたいと思うのです。しかしそうは言うものの、実はこの神を愛するというのも、私たちの隣人を愛するというのもいざ実践しようとするとなんな簡単なことではありません。

そのためイエスはここで、どうしたら私たちがそれらの愛に生きることができるか、その秘訣を示しているのであります。

イエスはここで、律法学者の問いに対して、第一に、第二にと語っていますが、何故順番をつけているのでしょうか。それは私たちが、私たちの隣人^{となりびと}を愛するようになるためにはまず神との愛の関係が回復されることが必要であるからです。ですからこの順番は大切なのです。しかも、聖書はここで「あなたの隣人^{となりびと}を自分自身のように愛しなさい。」と命じています。それは自分自身と神さまとの関係が回復されていませんと自分を愛することができないからです。そして神さまと私との愛の関係が回復され、私が神さまからどんなに愛されている大切な存在であるかということを知ることなしに私たちは自分の隣人^{となりびと}を愛することはできないのです。このあなたの隣人を愛するという言葉は「自分を愛し、大切にケアしながら、あなたの隣人^{となりびと}を愛しなさい」という意味が含まれているそうです。何故なら、自分を大切にできない人、愛せない人は自分の隣人^{となりびと}をも大切に扱い、愛することができないからです。

それでは私たちはどうしたら、心から神を愛し、隣人を愛することができるようになるのでしょうか。それは私たちが神が遣わされたイエス・キリストを救い主として信じ、受け入れることによってであります。イエスに結びつくのです。それはその時からイエスと共に歩む人生が始まるからです。残念ながら私たちの心の中には自己中心で自分勝手な愛しかなく、いくら自分の隣人^{となりびと}を愛そうとしても愛せないからです。ですから隣人愛に生きるためにはまず私たちがイエスを救い主キリストとして信じ、心の中に迎え入れ、そのイエスから愛を頂く必要があるのです。イエス・キリストはこのように神の戒めを破り、神の創造の目的から離れてしまった私たち人間をもう一度本来の神の創造の目的に回復するためにこの世に救い主として来られたのです。それは私たち人間がもう一度神との愛の関係を回復し、心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、私たちの神を愛し、私たちの隣人を愛する者となるためなのです。ここにこそイエス・キリストの救いの目的があるのです。私たちもこの創立 39 周年を迎えて、このすばらしいキリストの福音を信じ、救いを頂いた者として、この愛の福音を伝える使命にいつまでも生きる教会であり続けたいと思うのです。